

パーキンソン病における 高次脳機能症状の診方

～遂行機能障害への取り組み～
日常生活における目的行動の障害



仁医会 訪問サービスセンター
訪問リハビリテーション課
作業療法士 服部 弘治

2011/11/11

JHNリハビリ研究発表会

1

20世紀迄の高次脳機能障害発見事項

《発病初期～》

①約30%に非認知症者に高次脳機能障害有り

《中期以降～》

②約30%に精神緩慢を主徴とする皮質下性認知症有り

③約30%に日常に支障をきたすほどの認知症有り

2011 11/11

JHNリハビリ研究発表会

2

評価方法の選択・対象者

在宅の特徴：介入短時間・日常易導入性・道具携帯性
 <評価方法>

① DEX (The Dysexecutive Questionnaire)
 : 遂行機能障害質問表

対象者は、ご利用者と主介護者
 20項目、5段階評価、主・客観性から評価可能
 質問項目が行動・認知・情動に大別可能

②対象者：遂行機能障害⇒ 有：2名 無：1名
 ※認知症を伴わないご利用者3名中

2011.11.11

JHNリハビリ研究発表会

3

症例報告1 遂行機能障害有

年齢 82歳

性別 男性

発症経過年数 11年

Hoehn-Yahr重症度分類：Ⅳ度

【問題点】

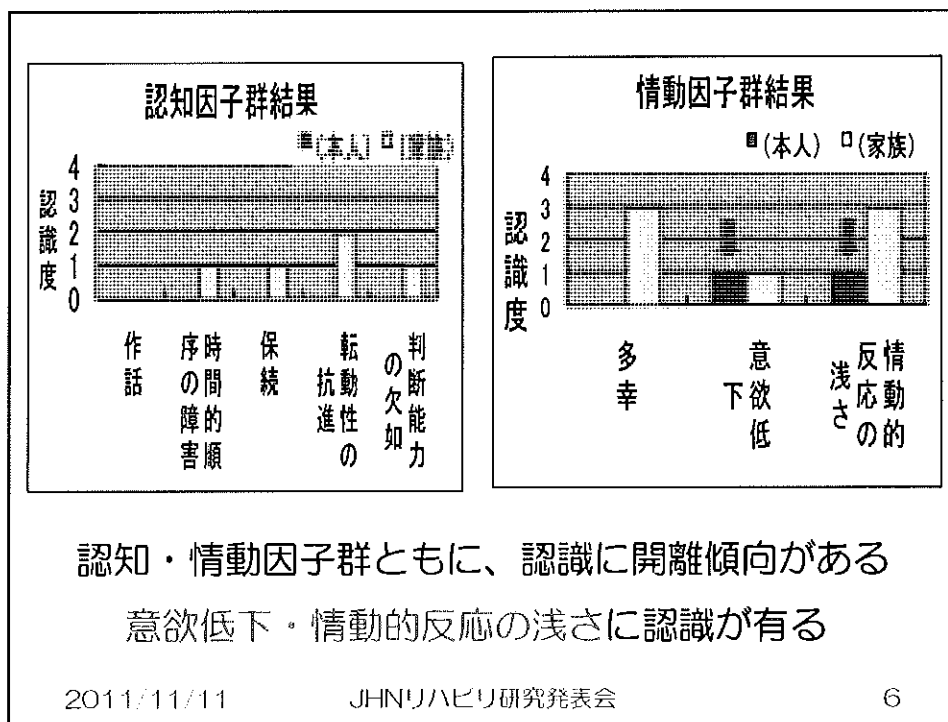
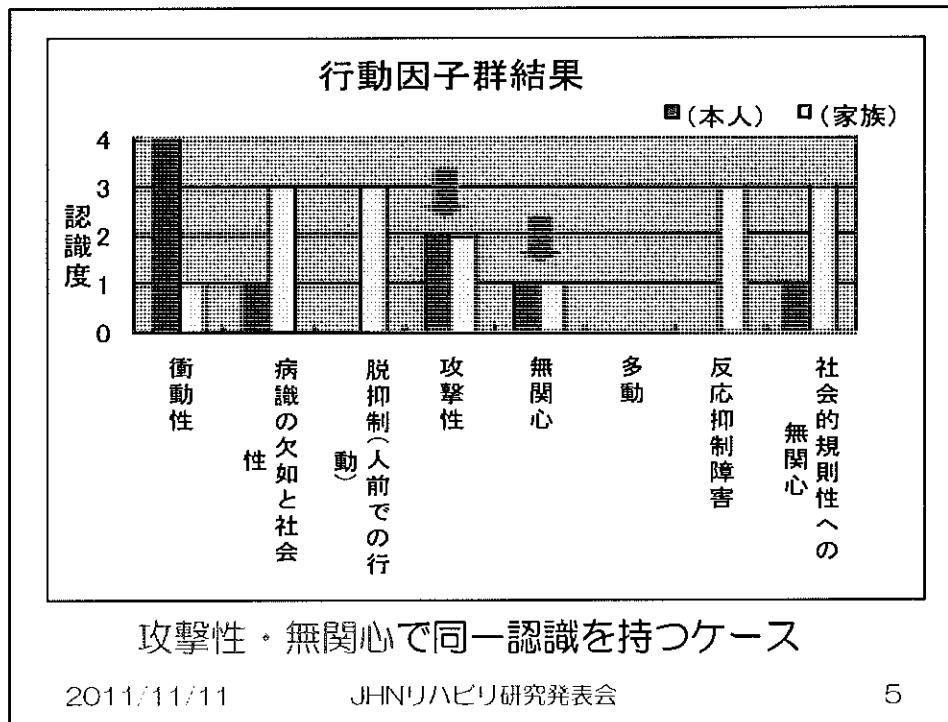
家族：夜間ベッド上尿瓶→トイレへ起居し転倒

セラピスト：理解している様子→動作異なる

2011.11.11

JHNリハビリ研究発表会

4



症例報告2 遂行機能障害有

年齢 72歳

性別 女性

発症経過年数 19年

Hoehn-Yahr重症度分類：Ⅳ度

【問題点】

家族：家事動作で両手作業を行い転倒する

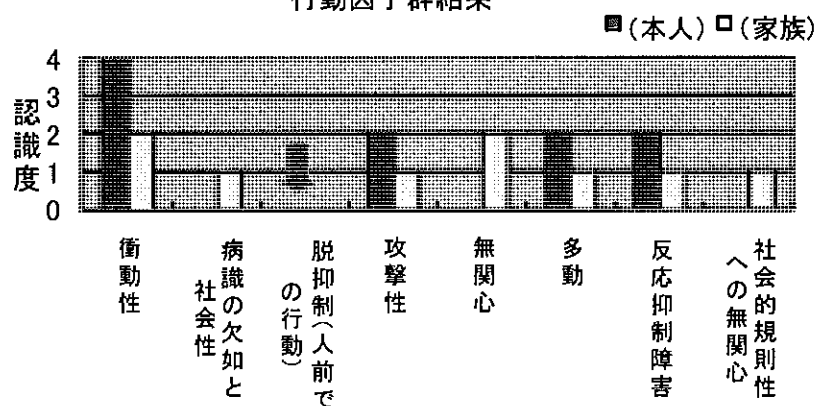
セラピスト：指導内容の定着が困難

2011/11/11

JHNリハビリ研究発表会

7

行動因子群結果

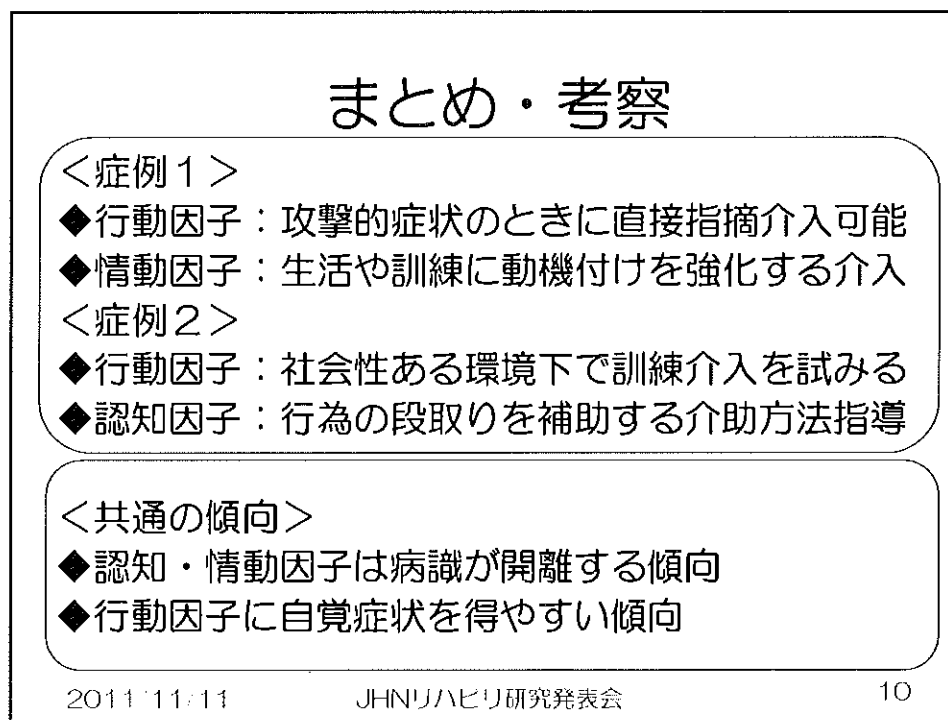
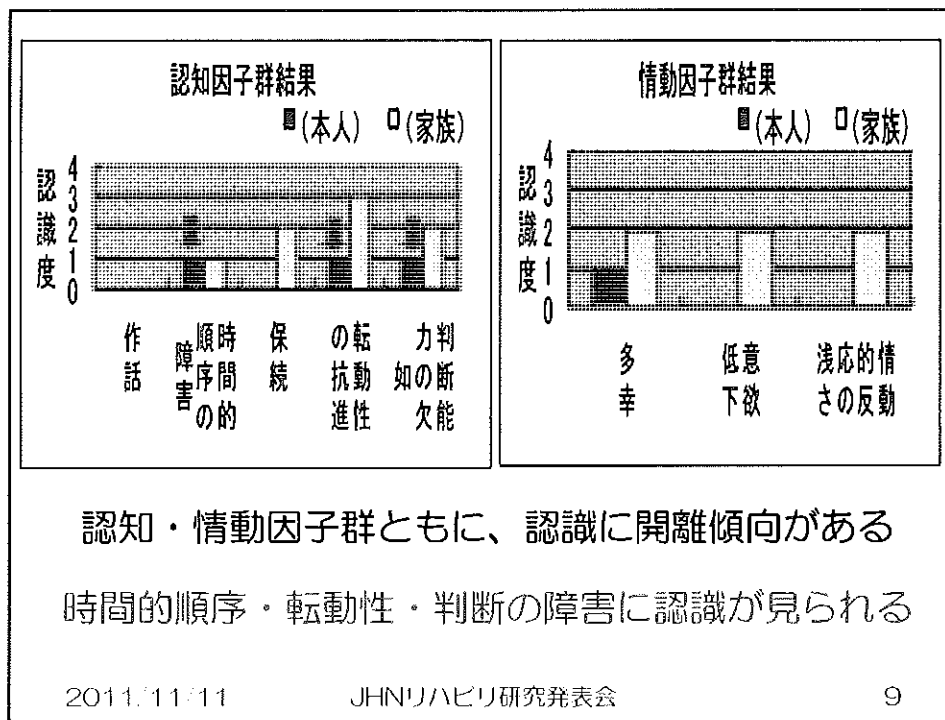


自分の意に反して身体が動くことに自覚を持つ傾向
しかし、人前では抑制が保たれている

2011/11/11

JHNリハビリ研究発表会

8



結論

DEXでは以下の活用が考えられる

- 主介護者へ病態を「見える化」すること
- 遂行機能障害の有無や傾向を掴むこと
- 病態に合わせた訓練プログラム、介護指導をすること

課題

◇ワーキングメモリー・セット変換機能の評価方法の検討

◇DEXについて症例を重ね、精査が必要

2011.11.11

JHNリハビリ研究発表会

11

参考文献

- 1)江藤文雄,武田克彦,原寛美,坂東充秋,渡邊修:高次脳機能障害のリハビリテーションVer.2,医歯薬出版,pp2-32,pp38-40,pp176-181,2009.
- 2)大槻美佳:パーキンソン病の高次脳機能障害.MB Med Reha No.76:21-29,2007.
- 3)富樫尚子,宮崎晶子,永井知代子,岩田誠:前頭葉損傷患者の視空間的ワーキングメモリーの障害,迷路課題による検討.失語症研究,第22巻,第4号
- 4)小早川睦貴:パーキンソン病の認知機能障害,昭和医会誌.第69巻,第1号,pp24-30,2009.
- 5)室橋春光:読みとワーキングメモリー:『学習障害』研究と認知科学.2009
- 6)鹿島晴雄:BADs 遂行機能障害症候群の行動評価,日本版.Shinkoh Igaku出版,2003.